

# 知識構築システム ornb を利用した学習過程の考察

河野大登<sup>\*1</sup> 福森聡<sup>\*2</sup> 西谷滋人<sup>\*2</sup>

hoge hoge

Kono Hiroto<sup>\*1</sup>, Satoshi Fukumori<sup>\*2</sup> and Shigeto R. Nishitani<sup>\*2</sup>

**Abstract** – At graduate research, although the process is more important than the results, most students don't notice it. Because the guild system is nice to learn the process, the graduate research possesses a kind of relationship between a mentor and a padawan learner.

On this project, we are developing a system for noticing importance of learning process, ornb, whose specifications and the connections to a static web system, jekyll,

**Keywords** : keyword 1, keyword 2, keyword 3, keyword 4, keyword 5

## 1. Introduction

### 1.1 背景 I - 大学の学び

卒業研究などのゼミナールは、フンボルト理念を基礎としている。その通説を潮木は次のようにまとめている。

近代大学の出発点は1810年に創設されたベルリン大学である。この大学の基本構想を作ったのは、ヴィルヘルム・フォン・フンボルトであり、近代大学はこのフンボルト理念から始まった。フンボルト理念の中核は研究主義にある。つまり、大学は教育の場である以上に研究の場であるという考え方は、このフンボルトから始まった。これがドイツばかりでなく、世界の大学を変えた。- アルカディア学報（教育学術新聞掲載コラム）, No.246

と。また、「大学が伝えるべきことは、いかにして新たな知識を発見するか、いかにして知識を進歩させるか、そのための技法である」との観点から、「研究する学生」を志向したとしている。

今日の学生が、このような深遠な思想を理解して、長い受動的学習の最終段階として、ゼミナールに参加している様子は見受けられない。研究のための予備知識の習得に役立つと思って課されているレポートや試験などは、新しい発見につながる途中経過を求めているにもかかわらず、既存の知識の暗記という結果のみを求めているという誤ったメッセージとして、学生が受け取っている可能性がある。早い段階で実践的な課

題を、project based learning や active learning として取り入れる試みがなされているが、かける時間の割に、成果をあげるのが難しいとされている。

最新の「教育」を行うと看板を掲げている大学に通う今日の学生は、大学は研究の場であるという認識が薄く、卒業研究や、研究室におけるゼミへの参加にどのようなスタンスで取り組みがいいか明確には理解できない。

学生には、研究室とは、「大学システムが切り捨てようとして来た、徒弟制的な制度である」ということは全く脳裏にない。

1989年にグロスハンスの指摘によれば、西ヨーロッパとほかでもない米国において中略

徒弟制は最も価値のある、しかも最も力のない労働者を統制するための伝統的な形態だと長い間みなされていた。LaveWenger[p.41]

これが、徒弟制に対する一般的な意識であり、大学生の多くもそのように認識していると考えられる。

### 1.2 目的

次節で示す通り、このような旧態然とした徒弟制も現代的な視点で見直しが進められている。本プロジェクトで提供しようとするシステムは、

- 研究室は徒弟制
- 学生はそれを知らない

という前提のもとで、徒弟制を新たな学習形態として提供することを目的としている。

次節では、どのような経緯で徒弟制が見直されて来たか、また、学習がAM/PMという視点によってどのように捉えられているかを明らかにする。その上で、近代的な徒弟制を研究室活動に導入するのに必要となる仕様を列挙し、それに基づいた実装デザインを示す。

\*1: 関西学院大学大学院 理工学研究科

\*2: 関西学院大学 理工学部

\*1: Graduate school of Science and Technology, Kwansei Gakuin Univ.

\*2: Department of Informatics, Kwansei Gakuin Univ.

## 2. 徒弟制の見直し

### 2.1 状況に埋め込まれた学習

1991年にレイヴとウェンガーによって、「状況に埋め込まれた学習」あるいは「正統的周辺参加」という学習形態・概念が提案された。彼らは、アフリカの仕立て職人や助産婦の育成法を社会的に詳しく調査した結果、徒弟制のなかに学びの本質があると指摘した。少し複雑ではあるが、その概念をもっとも短くまとめたいと思われる箇所を以下にそのまま書き写す。

学習はいわば参加という枠組で生じる過程であり、個人の頭の中ではないのである。このことは、とりもなおさず、共同参加者の間での異なった見え方の違いによって学習が媒介されるということである。この定義では「学ぶ」のは共同体である、あるいは少なくとも、学習の流れ(context)に参加している人たち、といえよう。学習はいわば、共同参加者間にわかち持たれているのであり、一人の人間の行為ではない。生産過程では徒弟(見習い)が益々増大していく参加によってきわめてドラマティックに変容していくものではあるが、この変容の発生の場と発生の条件は、さらに広範囲の過程そのものである。徒弟の親方たち自身が共同学習者としてふるまうことを通しどれほど変化するか、したがって、習熟されている技能でもその過程でどれほど変化するか。実践者の共同体がより大きくなると、徒弟の形成によって共同体は自らを再生させるが、同時に変容もすると考えられる。LaveWenger[pp.8-9]

中略

また新参者を親方、ボス、あるいは管理者と深く対立する関係に陥らせる、参加させるよりも非自発的に隷従させるなど、これらの条件は実践における学習の可能性を部分的に、もしくは完全に、歪めてしまうと唱えた。LaveWenger[p.42]

と記している。

### 2.2 AM/PM

1998年数学者のSfardは、Lave and Wengerの考えを受け、学習者、教授者、研究者の知識に対する心持ちをAM(Acquisition Metaphor)とPM(Participation Metaphor)と名付けて分類した。表1に示した通り、学習に対する従来の考え方であるAMは、個人が知識を習得することを目標とし、「学習」とは何かを獲得することであった。また、「知る」とは個人が所有する

ものであるとしていた。一方で学習に対する新しい考えであるPMは、学習の目標は共同体の構築であり、「学習」とは参加者となることである。学習者は、徒弟であり、教授者は、有識の参加者と定義した。つまり、個人ではなく、教授者、学習者がチームとして、また徒弟制を築くことでお互いの知識構築がはかどる仕組みとなっている

### 2.3 PMの実践例と学生の受け止め方

#### 2.3.1 ペア評価の意図

関西学院大学理工学部・情報科学科で西谷がPM、参加型学習の実践としての試みに、数式処理演習という3年生向けの演習がある。学生は好きなもの同士がペアを組み、授業中課題や期末試験をペアで受け、ペアの点数は全く同じとなる。ペアで「相方の足を引っ張らないように」という思考に至り、互いが怠けることなく、授業や課題に意欲的に取り組む。その結果、互いに高め合い、知識の定着につながる。「共同体の構築」、「参加する」というPMの実践を意図している。しかし、実際には知識の定着に至らない学生が多数いる。

#### 2.3.2 学生の見え方

なぜ、

- 一つ目の要因はペアによる演習のため、一人が作業すれば課題をクリアできる点である。つまり、問題毎に役割を振り分け片方が問題を解いている時、もう片方は携帯を見るなど考える事を完全にやめることがある。一緒に考えることをせず、「休憩」の時間を作ることで知識定着を目的とするのではなく、課題達成、単位習得の事のみを考えた結果である。
- 二つ目は、ペアで課題を一つ提出することが、いわゆる出席点となるため一人が授業を欠席しても、点数が減点されることがない点である。これは、一つ目に述べた要因より酷い例であり、日にち毎に出席する担当を決めることで授業に出席、参加すらしない場合があった。

結果的に見るとこの授業は、PMといった考え方を気づかせる授業ではなく学生にとって、「授業に出なくても良い楽に単位を取れる授業」という風に見受けられた。

個人での学習よりも互いに高め合い、知識・スキルを習得するといったペアは一部であり、優秀な生徒と、そうでない生徒がペアを組んだ場合、前者がほとんどの課題をこなす、後者はほとんど考えないというパターンも存在した。

PMを理解して、共同体を作ろうとまで考える生徒はいったんだろうか？

教育の非対称性、

表1 Acquisition metaphor と Participation metaphor の比較.

Acquisition metaphor	要素	Participation metaphor
個人を豊かにする	学習の目標	共同体の構築
何かを獲得する	学習するとは	参加者となる
受容者, 再構築者	学習者	周辺参加者, 徒弟
供給者, 促進者, 仲裁人	教授者	有識の参加者
資産, 所有物, 一般商品	知識, コンセプト	実践, 論考, 活動の一側面
持つ, 所有する	知るとは	所属する, 参加する, コミュニケーションをとる

- 教える側はどう役にたつかを知っているが,
- 教わる側は, 知識を獲得するまでわからない.
- サボりたい
- どこで役にたつかわからない
- 役に立たない

数学, 英語全てやくに立たない. ならば, 単位取得で縛りましょう. となるが, それでは古いタイプの徒弟制となんら変わりはない. どうすれば, 役に立つことに気づくのか...

### 3. 構築システムのアイデア

新しい徒弟制という視点に立って, 研究室運用システムとして

- 日々の個人活動を構成員に公開する (blog システム)
  - ペアによる個別指導 (遠隔ペアプロ)
  - 欠席者のフォロー (スタンプ集め)
- という機能提供することを当初の目標とした.

#### 3.1 blog システム

ゼミ活動しているかどうかはなんらかの方法で記録する必要がある. 毎日ゼミにくる学生は何かしているのがわかるし, あるいは細かく指導することが可能であるが, 毎日来れない学生にはメールなどで指導することが普通であろう. しかし, 今時の学生は, 自ら問い合わせを行うことをしない. そこで, これを自動化する必要がある.

これらを

- my\_help
- org-mode
- jekyll

のそれぞれの機能を利用して実装した. レポート作成から公開までの流れは図1のようになる.

##### 3.1.1 my\_help = 直交補空間

my\_help は Rubygems で提供されている, ファイル構造において, メモやレポートが増えれば chunking の必要が出てくる. ところが, chunking することにより, ディレクトリ構造が深くなる. その結果, レポートやメモの場所が把握できなくなる. これに対して, my\_help は直交補空間を実現した知識構築を補助す

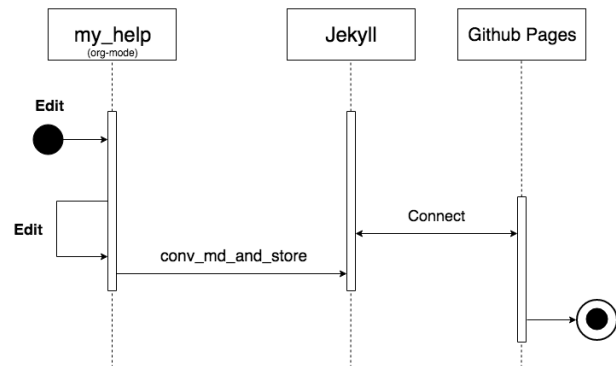


図1 レポート作成から公開までの流れ

るツールである。ディレクトリに拘束されることなく、メモやレポートを作成・管理できるという利点があるため、どこからでもアクセスできる。my\_help では Blog という形で文書を作成し、構成員に日報を伝える。

### 3.1.2 org-mode = 便利な mark down

org-mode は、Emacs 上で動作するアウトライナーでありプレーンテキストの文書作成環境である。ノートの保存、TODO リストの管理、スケジュールや時間の管理、また発表原稿やスライドの作成など様々な用途に対応している。また、コードの実行はもちろん、リンク付け、テーブル表記の入力、図や表の表示、ライブ計算、HTML や  $\text{\LaTeX}$  への変換等の機能も兼ね備えている。今回のレポートとなる文書の作成するために、org-mode を用いる。

### 3.1.3 jekyll = 晒すと何がいい？

my\_help は emacs の org-mode を利用しているが、個人での使用を前提としており、公開するためのシステムが存在しない。jekyll は Rubygems で提供されている静的サイトジェネレーターである。テーマや構成を変更することができ、好みのサイトを作成できる。

次に、my\_help で作成された Blog を Jekyll と GitHub Pages を用いて公開する。Jekyll は、Rubygems で提供される静的サイトジェネレーターである。また、GitHub Pages と連携し公に公開する。

## 3.2 遠隔ペアプロ

ペアの活動や欠席者の遅れをフォローするシステムを考案する。現在、西谷研究室ではゼミを中心とした、個別の時間調整を行っている。しかし、1 週間学校に來れない人もいるため、それを援助すべく遠隔でもペアプロや知識の共有をする。ペアプロが機能する理由は、

ただ始めること。これがたぶん生産性の鍵なのだ。ペアプロが機能する理由は、「相方とペアプロ作業を予定する」ことで、「作業を始めることをお互いが強制する」からに違いない (原文より訳出)。Joel Spolsky 著、青木靖訳「Joel on software」(オーム社、2005)p.133。

であるとされており、空間を共有する必要はない。

キャンパスが郊外にあるため、効率的にゼミナールの研究を進めるためには、遠隔での共同作業が不可欠である。そこで、いくつかの環境を使って実際の作業を試行して、結果を収集する。

そのような環境で必要となる仕様は、新しいタイプの徒弟制の視点に立って、

1. 先輩と後輩によるペアプロ
2. コードのリアルタイム共有
3. 音声、ポインタなどによる指示

## 4. 作業記録、振り返り

などが効率的に行えることである。

### 3.3 スタンプ集め

また、構成員は教授者と学習者の両方に成り得るものとし、欠席者はゼミ出席者を教授者としゼミの内容や課題を教えてもらう学習者とする。

学習者は、教授者に教えてもらいながら、課題に取り組むとともに、Blog を作成し、知識定着をはかる。課題達成後は教授者が学習者にスタンプを押す。そのスタンプが、課題達成の証明となり、卒業するまでの必須過程とする。また、ゼミ欠席者でも教授者にスタンプを押してもらうと、教授者としての資格を獲得し、他の欠席者に教える事ができ、課題達成後はスタンプを押す。

ゼミ毎にスタンプを用意し、全てのスタンプの取得が卒業の必須項目とする。

例えば

- 全員 jekyll を入れて、blog を晒す
- というゼミで実行した課題があるとする。そいつを全員が実行したかどうかを、教えた方がチェックする。

手順は以下の通り、

- 欠席者が出席者に聞く
- 出席者がスタンプを押す
- それが埋まってなかったら卒業なし。

これを自動化するシステム。

いっぺん聞いたら他の人に教えるのはあり。そうすると、教えることによる記憶強化の可能性が高まる。また、不明瞭な点のあぶり出しが可能になる。